

「正岡子規」と「六郷」

①「正岡子規が六郷を通った」

正岡子規が美郷町六郷を通っている。明治二十六年のことである。

子規は、明治二十六年（一八九三年）、七月一九日から八月二十日までの約一ヶ月間、東北地方の旅をした。芭蕉の歩いた「奥の細道」を辿り、紀行文「はて知らずの記」を書いた旅の旅だった。明治二十六年七月十九日に上野を出発して、白河・郡山・福島・仙台・塩釜・松島・仙台・山寺・天童・東根・最上川・酒田と旅を勧めた。酒田から象潟へ行ったが、「象潟は昔の姿にあらす。塩越の松はいかがしたりけん、いたづらに過ぎて善くも究めず。」と象潟を後にし、八郎潟まで足を延ばしたのが八月十三日である。そこから秋田に引き返した。

当時、まだ奥羽本線も羽越線もなかった。太平洋側の東北本線だけが通っていた。旅を終了した子規は、汽車で東京へ帰るべく黒沢尻（北上）に向かう。そのために秋田から刈和野、神宮寺を通り大曲に一泊した。子規は、横手から平和街道を通るつもりだった。しかし、六郷から黒沢尻まで新しい近道が出来たと教えられて六郷へ向かった。この日、子規は大曲から六郷を通り、奥羽山脈を越えて湯本温泉まで歩いている。

「はて知らずの記」はその紀行を句文で著した作品で、同年、新聞『日本』に連載された。明治二十六年七月二三日から九月一〇日までの掲載だったから、旅の途中から原稿を新聞社に送って掲載していたことになる。

六郷・六郷東根を通ったのは、明治二十六年（一八九三）八月一六日の朝である。

②「子規の通った道」

子規の通った大曲から湯本温泉までの道を明らかにしたいがわからない部分が多い。先ず大曲から六郷までどこを通ったかわからない。国道（羽州街道）か、坪立て道か、どちらかであろうが全くわからず推測するだけである。次に黒森山を越えた道がわからない。いずれ黒森を越えたことは確かである。展望台に句碑を建てたのは間違いではない。さらに、笹峠から下前道はわかるが、沢内通りに出てから温泉までの道がはっきりしていない。いずれわかってくると思う。

大曲で、六郷から山越えの新道がありそれが近道だと教えられてそれに向かったことは確かである。はて知らずの記には、「十六日六郷より岩手への新道を辿る」とあるし、草稿にも「十六日大曲を發し六郷より新道に入る。六郷東根に午餐す」とある。

子規は、六郷の大町、上町通りを通っている。この通りを過ぎて子規は左に曲がっている。つまり馬町方面である。ここから久左衛門が開いた新道に入った。現在の高良酒店と田丸呉服店の間の小路である。昭和の初めまで米町角は丁字路で、東根に向かう街道はこの小路が正式道だった。この道は、入ってすぐ南に直角に曲がり、またすぐ東に直角に曲がるクランク状の道だった。それを明治時代の始めに畠山久左衛門が高円寺の境内を削り曲りを解消した道である。

子規はこの道を野中、紀ノ国、関田、妻ノ神、荒川、そして潟尻付近まで通った事は確かである。ここから黒森山の陰、俗に「なつザカイ」と呼ばれている山内道との丁字路まで行く経路が謎である。現在の車道でないことは確かである。

ナツザカイから下前村までは平坦な山道がある。子規はここを通った。「蝸や夕日の里は見えながら」の句はこの道の途中で詠まれた。下前には句碑がある。下前村から沢内道までも一本道である。問題は山を抜けてから温泉地までの道である。これが不明である。

温泉街の中央にある句碑公園には子規の文学碑が二基ある。子規は湯本温泉から平和街道へ行き左折して東へ向かっている。「ホツト湯田」駅に子規の句碑があるが子規はここへは行っていないと思われる。

平和街道を黒沢尻（北上）へ行きそこで子規は二泊している。電信為替を待つためであ

る。十七日、十八日と泊まって、十九日に黒沢尻から汽車に乗り水沢に行き「水沢公園」などを見て、水沢から夜行で東京に向かった。

③ 「子規の句碑」

子規の通った町々には句碑が建てられている。
美郷町六郷の黒森山展望台にも句碑があるが、これは六郷の町制百周年を記念して平成三年に六郷町で建てたものである。この他に正岡子規が通ったことを記念して、その土地の人達によって建てられた句碑が随所に存在する。秋田県・岩手県の子規句碑を尋ねてみた。

① 本荘市 羽後信用金庫本部前

一籠の
こき紫や
桔梗賣
子規

本荘市長佐藤憲一氏の筆により建立す
昭和五拾老年四月 信親会

明治廿六年子規居士
この地を通り 朝市の景
を写したる一句を記念して

② 本荘市 羽後信用金庫本店前

朝市や
鯛にかぶさる
笹の露
子規

明治廿六年子規居士この地を通り
朝市の景を写したる一句を記念して

本店新築移転を記念して建立
平成式拾六年五月
羽後屎尿金庫

理事長 伊東富男
揮毫 植田清寛

③ 潟上市三倉鼻公園

秋高う 入海
晴れて 鶴一羽
子規

三倉鼻は子規足跡の北限の地である。子規は明治二十六年、二十七才でこの地に訪れている。「丘上に登りて八郎潟を見るに四方山低う囲んで細波渺々寒風山の屹立するのみ。三つ四つ棹さし行く筏静かにして心遠く思い幽かなり。秋高う 入海晴れて 鶴一羽」これは、その時の紀行文「はてしらずの記」の一節である。八郎潟は変貌した。しかしこの一句は永久に八郎潟の姿をつたえるであろう。

昭和二十九年九月十五日
正岡子規句碑建設会

④ 美郷町六郷 黒森山展望台

句碑銘

蜻蜒を	子規
相手に	
のほる	
峠かな	
巽巨詠子謹書	

正岡子規（一八六七〜一九〇二）。俳句の革新を行
い「ホトトギス」を主宰する。
明治二十六年（一八九三）「はてしらずの記」の旅
で八月十六日この峠を通つて詠んだ句である。
六郷町制施行百周年を記念し子規の九十回の命日
にこれを建立する。

平成三年九月十九日

六郷町

（揮毫巽巨詠子は、現代俳句協会秋田県会長、秋田
県功労者・俳人）

⑤ 岩手県湯田町下前

（台石の刻文）

蝸や	夕日の
里は	見えながら
	子規

正岡子規 明治廿六年八月十六日秋田県六郷町よ
り新道を辿りこの地に至る。夕映えの下前を望みて
感あり。 蝸や 夕日の 里は見えながら 其夜
湯本温泉に宿る。時を経 郷土文化の振興を冀い有
志発企し郷党相図りて句碑建立を決す。昭和廿五年
拾月廿四日宿願成り子規曾遊の地を■し之を建つ。

揮毫 泉川白水、横手の人、南画家・俳人

⑥ 岩手県湯本温泉（句碑公園）

山の温泉や	天の河山	子規
裸の上の		
夏蔭の	この道を	
斯く	行きたらん	虚子

昭和二十五年七月建之

黒沢尻町青柳町
和之内石材店

⑦ 岩手県湯本温泉（句碑公園）

宵月をたよりに心細くも猶一二里の道を辿りて とある小村に出でぬ。こゝは湯田
といふ温泉場なりけり。宿りをこへば家は普請に係り客は二階に満ちて宿し参らす
べき処うなしとことわる。張ひて請ふに 台所の片隅に炉をかゝへて畳二枚許り敷きわ
が一夜の旅枕とは定まりぬ。建具とゝのはねば軒声三尺の外は温泉に通ふ人音常に
絶えず。

白露に家四五軒の小村かな
山の温泉や裸の上の天の河
肌寒み寝ぬよすがらや温泉の臭ひ

秋もはやうそ寒き夜の山風は障子なき窓を吹き透して我枕を襲ひ薄蒲団の縫目深く潜みて人を窺ひたる蚤の群は一時に飛び出でゝ我夢を破る。草臥の足を踏みおぼして眠り未だ成らぬに。十七日の朝は枕上の藁の中より声高かく明けはじめぬ。半ば腕車の力を借りてひたすらに和賀川に従ふて下る。

子規「はてしらずの記」より

平成十二年三月吉日
湯本温泉観光協会建之

⑧ JRほつとゆだ駅前

秋風や

人あらはなる 山の宿

子規

半ば腕車の力を借りてひたすらに和賀川に従ふて下る。こゝより杉名畑に至る六七里の間山迫りて河急に樹緑にして水青し風光絶景雅趣掬すべく誠に近国無比の勝地なり。

揮毫 田村了咲
石工 渡部宇太郎
湯沢市関口の人
昭和四二年六月四日
建立 湯田町

⑨ 北上市石羽根ダム湖畔広場

こゝより杉名畑に至る

六七里の間

山迫りて河急に

樹緑にして水青し

風光絶景雅趣掬すべく

誠に近国無比の勝地なり

三里一直線の坦途を

一走りに

黒沢尻に達す。

正岡子規文学碑

碑文「はてしらずの記」より抜粋

平成6年3月

子規の旅百周年記念授業実行委員会

⑩ 北上市 雷神社境内

碑正面下の台石に碑を建てるに至る経緯が刻まれている。

立碑の経由

灯のともる
雨夜乃
桜しづか也

子規

正岡子規、明治二十六年八月十七日(旧七月六日)湯本温泉より黒沢尻にいたり伊勢屋(豊田家いまの東京屋の地)へ投宿、その夜は七夕の前夜祭、新町雷神社まで散策、稲光ときどき雨も降り出す。翌日は終日雨止まずついに逗留、新体詩に凝る宿の青年玉萩と隣の青年俳人志水(佐藤吉治)とたのしく俳談、子規は色紙に一句を認め志水へのこす。

六十三年経て黒沢尻も北上市となり本年五月およそ五万五千人に発展新幹線停車駅となる。

時に有志遺墨の句を拡大して刻み当時宿の町はずれにありし雷社（いまこの地へ移る）の境内え建立す。（新幹線初発の記念日）

昭和五十七年六月二十三日

玉萩長男勝介書

八十二歳

⑪ 水沢市 水沢公園

背に吹くや五十四郡の秋の風

子規

蜻蜒毫

正岡子規先生往年みちのく行脚の途當公園にて此の句を詠まる

昭和二十四年十月三十日 砂金兵記 建之

揮毫者岩淵氏蜻蜒は子規門下虚子に学ぶ

④ 「はて知らずの記」

「はて知らずの記」冒頭の文、はて知らずの旅に出る心情を書いた序文である。かくて東京上野を出発したのが七月一九日である。これから一ヶ月間の旅の始まる。

松嶋の風、象潟の雨いつしかとは思ひながら病める身の行脚道中おぼつなくうたた寝の夢はあらぬ山河の面影うつつにのみ現れて今日としも思ひ立つ日のなくて過ぎにしを今年明治二十六年夏のはじめ何の心にかありけん。

松嶋の心に近き恰かな

裕（あわせ）

と自ら口ずさみたるこそ我ながらあやしうも思ひしか、つひにこの遊歴とはなりけらし。先ず松嶋とは志しながら行くては何処にか向はん。ままよ浮世のうき旅に行く手の定まりたるもの幾人かある。山あれば足あり金あれば車あり。脚力尽くる時山更に好し、財布軽き時却て羽が生えて仙人になるまじきものにもあらず。自ら知らぬ行末を楽みにはて知らずの日記をつくる気樂さを誰に語らんとつづやけば罔両傍に在りてうなづく。乃ち以て序となす。あなかしこ。

芭蕉の「奥の細道」の跡を訪ねて、俳句を芭蕉や蕪村の作風まで押し上げて、俳句を独立した文学の一ジャンルにまでする鍵を求めての旅である。その旅も八郎潟で終了し、目的を果たした。後は東京への帰途だけである。帰る途中六郷を通り過ぎた。

「はて知らずの記」の六郷の部分記す。そこには「蜻蜒を相手に上る・」の句は見つけられない。

十六日六郷より岩手への新道を辿る。あやしき伏屋にやうやう午餉したためて山を登ること一里余樵夫歌馬の嘶き遙かの麓になりて巔に達す。神宮寺大曲を中にして一望の平野の下にあり。山腹に沿ふて行くに四方山高く谷深くして一軒の藁屋だに見えず。処々に数百の牛のむれをちらして二人三人の牛飼を見るは夕日も傾くにいづくに帰るらんと覚束なし。路傍覆盆子林を成す。赤き実は珠を連ねたらんやうなり。急ぎ山を下るに茂樹天を掩ふて鳥声聞かず。下りくだりてはるかかの山もとに二三の茅屋を認む。そを力にいそげども曲りに曲りし山路はたやすくそこに出づべくもあらず。

蝸や 夕日の里は 見えながら

十六日は湯本温泉に泊まり、十七日、十八日は黒沢尻に泊まって電信為替の到着を待った。十九日の朝電信為替が届いたので午後三時の汽車で水沢に向かった。水沢で「駒形神社」などを見て、その夜の汽車で東京へ向かった。一ヶ月の旅であった。二十日上野に着いて「はてしらず」の旅は終わった。

子規は、「はてしらずの記」は次のように締めくくった。

始めよりはてしらずの記と題す。必ずしも海に入り天に上るの覚悟にも非ず。三十日の旅路つつがなく八郎潟を果てとして帰る目当てはついに東都の一草庵をはなれず。人生はもとよりはてしらずなる世の中に、はて知らずの記を作りて今はその果てを告ぐ。はてありとて喜ぶべきにもあらず。はてしらずとて悲しむべきにもあらず。無窮時の間に暫く我一生を限り我一生の間に暫くこの一紀行を限り冠らすに、はてしらずの名を以つてす。はて知らずの記ここに尽きたりとも誰か我が旅の果てを知る者あらんや。

秋風や 旅の浮き世のはてしらず

「正岡子規 はて知らずの旅、宿泊地」

七月一九日	宇都宮	八月 五日	作並
七月二〇日	白河	八月 六日	楯岡
七月二一日	郡山	八月 七日	大石田
七月二二日	南杉田	八月 八日	古口
七月二三日	二本松	八月 九日	酒田
七月二四日	福島	八月一〇日	大須郷
七月二五日	飯坂	八月一日	本荘
七月二六日	飯坂	八月二日	道川
七月二七日	仙台	八月三日	一日市
七月二八日	仙台	八月四日	秋田
七月二九日	松島	八月五日	大曲
七月三〇日	仙台	八月六日	湯本温泉
七月三一日	仙台	八月七日	黒沢尻
八月 一日	仙台	八月八日	黒沢尻
八月 二日	仙台	八月九日	車中泊
八月 三日	仙台	八月二〇日	上野到着
八月 四日	仙台		

以上三三日間の旅であった。

⑤ 「発見された草稿」

子規が旅の途中で書いた草稿（した書き）が発見されている。旅の途中でしたためたもので新聞に載った原稿とは大分変わっている。「蜻蜓を相手に上る峠かな」の句もそちらの草稿の方に記載されている。この草稿は、大正三年に寒川鼠骨によつて発見された。鼠骨が子規の母親を訪ねると、母堂が髪を梳いていて梳き櫛の汚れを取ろうとして反古紙を使っていた。その字がどうも子規の筆蹟のようだと思つた。鼠骨はそれを貰つて帰った。彼が発見しなければ、草稿は反古として使い捨てられていたし、黒森展望台の句碑も無かつたことになる。奇しき縁を感じる。

「草稿」の六郷の部分を書き記す。

夕日ほのかに大曲の町に入りて旅店に没す。

夕月や 車のりこむ おおまがり

十六日大曲を發し六郷より新道に入る。六郷東根に午餐す。待つこと半時ばかりそ

こにて菓子など買ひ蓄へ山を上る。上りつめたる処に鳥居あり。これ或いは高木嶽と土手森山の間ならんか。それより山腹を行く牛群を放つ。覆盆子多し。茶屋も駄菓子も無き山路にいちごと清水いと有かたし。

馬方の 山て飯くふ 清水かな

旅人の 山路にくらす いちご哉

蜻蛉を 相手に上る 峠かな

山を下る茂樹天を掩ふ。樹間三々五々の村家を見下ろす。

蝸や 夕日の里は 見えながら

⑥ 「正岡子規について」

正岡子規は、近世文学から近代文学へと移行する新しい時代の文学を提案した。俳句や短歌の改革を唱え、俳句・短歌の近代化に成功した。俳句分類や与謝蕪村などを研究、芭蕉などへの回帰を提唱し、一八九七年（明治三十年）に俳句雑誌『ホトトギス』を創刊し近代俳句を完成へと導いた。子規の提唱した俳句は、高浜虚子、河東碧梧桐によって引き継がれ現代俳句となっている。そして明治三十一年（一八九八年）に「歌よみに与ふる書」を発表、万葉への回帰と写生による短歌を提唱して、写実的な短歌の実践を通して短歌の近代化にも成功している。子規の自宅を開催場所にした根岸短歌会は後に伊藤左千夫・長塚節・岡麓らにより短歌結社『アララギ』へと発展した。近代小説についても写実的文体を提唱し近代文学全体の方向性を示した。近代文学が現在有るのも正岡子規に寄るところが大きい。

正岡子規年譜

松山での少年時代

一八六七	慶応	三	家が火災に遭う。
一八六九	明治	二	父が隠居したので家督を相続する。父が死ぬ。（享年四〇）
一八七二	明治	五	母の父親（大原観山）の私塾で漢詩の素読をまなぶ。
一八七三	明治	六	一月 勝山学校に転入、竹馬の友・秋山真之と出会う
一八七五	明治	八	初めて漢詩「聞子規」をつくり、漢学者から添削を受ける。
一八七八	明治	一	四月 回覧雑誌「桜亭雑誌」を作る
			松山中学に入学し、漢詩の回覧雑誌をつくる。自由民権運動に感動する。
			愛比売新報に投稿した漢詩が掲載される。
			松山中学に失望して退学。

東京での健康な青春時代

一八八三	明治二六	六月一〇日	三津浜港を出港し東京に上京する
		六月一四日	上京して共立学校（のちに開成中学と改称）に入る。
		七月	須田学舎に入学
		一〇月	共立学校に転校、高橋是清に万国史を習う
一八八四	明治二七		随筆「筆まかせ」を書き始める。大学予備門（一高の前身）に合格して入学する。同級生に芳賀矢一・夏目金之助・山田美妙・菊地謙二郎がいた。
一八八五	明治二八	夏	上京後はじめて帰郷し、途中、京都や厳島であそぶ。

九月 秋山真之らと徒歩で鎌倉旅行を行う
坪内逍遙の『当世書生気質』『小説神髓』を読み感動
俳句作りは始める

一八八六 明治一九 大学予備門が高等中学と改称。この年から三年間野球に熱中する。
秋山真之が大学予備門を退学する

一八八七 明治二〇 一ツ橋外の第一高等中学校寄宿舎に移る。

夏、向島の長命寺で過ごし「七草集」を書く。月香楼の少女おろくに心引かれる。

八月 鎌倉江の島で二度咯血

九月二四日、旧松山藩主が経営している常磐会寄宿舎に入舎する。

咯血して子規と号する

一八八九 明治二三 一月、夏目漱石との交遊が始まる。

二月一日、新聞『日本』が創刊される。

四月三日、水戸まで徒歩旅行。

五月九日、再度咯血して肺病と診断される。以来、子規と号する。
寄宿舎の懸賞小説の課題作品『銀世界』を書く。

一八九〇 明治二三 九月一日、文科大学（＝帝国大学）哲学科に入学する。

松山にいる河東碧梧桐が子規に俳句を送るようになる。

秋、幸田露伴の『風流伝』に傾倒する。

一八九一 明治二四 二月七日、国文科に転科する。

三月、房総に旅する。

六月、学年試験を放り出して木曾経由で帰省する。

夏休みに松山俳句会を催すようになる。

芭蕉の句で写実的俳句を知る。

一二月一日、常磐会寄宿舎を出て、駒込追分に転居し一人暮らしをはじめ。小説「月の都」執筆。

冬、「俳句分類」に着手する。

一八九二 明治二五 一月一七日、母と妹を連れて東京着。

二月、自作小説「月の都」を幸田露伴に批評してもらうが不評。小説家志望を断念する。箱根から三島を旅する。

六月「獺祭書屋俳話」(二八回「日本」六、二六〇一〇・二二〇)

七月、学年試験に落第し退学を決意。帰省では漱石が京都まで同行する。

一二月一日、新聞社「日本」に入社する。月給一五円。福本日南、三宅雪嶺、千葉亀雄、佐藤紅緑、長谷川如是閑などがいた。下谷区上根岸町八八に住む。

俳句に生きる

一八九三 明治二六 一月 椎の友の連中と会合、句会をもつ

二月三日 俳句選を「日本」に連載

三月 「俳諧」創刊

五月二一日、初の単行本『獺祭書屋俳話』を日本新聞社から出版

七月一九日芭蕉の奥の細道を訪ねて上野を出発。旅行記「はて知らずの記」を新聞「日本」に連載する。

八月一六日、六郷を通り湯本温泉に宿泊(部屋は一階、台所の片隅)
八月二十日東北の旅から帰還、上野に到着する。

一八九四 明治二七

二月一日、現在地の子規庵に転居する。

二月一日、家庭向け新聞『小日本』に入り編集主任。

七月十五日、小日本廃刊。

この年以降「竹の里人」の名を用いる。

一二月、開通したばかりの総武鉄道に乗って佐倉に行く。

日清戦争に記者として従軍し、帰路船中で咯血する。

五月二三日から七月二三日まで神戸病院に入院。

須磨保養院にうつる。

八月二〇日、神戸を出発して二五日に帰郷して漱石の下宿に住む。

一〇月一九日に上京するが、その途中で奈良に遊び「柿食へば」の句をつくる。

一〇月三〇日、東京着。『俳諧大要』を日本新聞で連載

一一月、子規庵での生活を再開する。

一二月三日の子規庵新年句会に森鷗外、夏目漱石、高浜虚子、河東碧梧桐、内藤鳴雪らが参加する。

病気がしだいに悪化し、外出が困難になってゆく。

三月、病気はリウマチでなくカリエスと分かり驚愕する。

三月二十七日、第一回の手術。以後、病床の句会、郵便句会が毎月行われる。

四月八日、漱石が松山中学から熊本の第五高等学校に転任。

四月二一日から一二月三一日まで随筆『松蘿玉液』を新聞日本に連載する。五月、樋口一葉の『たけくらべ』を読んで驚き、日本新聞で激賞する。

一八九七 明治三〇

一月、柳原極堂が松山で「ホトトギス」を創刊する。

島崎藤村が訪れる。小説「曼珠沙華」を書く。

子規庵で新年発句会式を催し、懇親会を長蛇亭で催す

二月 佐藤三吉の来診を受ける

三月 手術

四月 小説『花枕』を「新小説」に発表

『俳人蕪村』を「日本」に連載

五月 看護婦を置く

六月 詩集『この花』出る

九月六日 熊本に帰る漱石に句を贈る

一〇月 桂湖村、京都の愚庵の柿を持参

この頃漱石の句を「日本」と「ホトトギス」にしばしば載せる。
一二月二四日 第一回の蕪村忌を子規庵で開催

短歌革新運動に乗り出す

一八九八 明治三一

一月一五日から毎月「蕪村句集」の輪講会をはじめめる。

「ホトトギス」を高浜虚子が引き継ぎ、発行所も東京に移す。

伊藤左千夫が「日本」に「新自賛歌」批判の投稿をする。これがきっかけで歌論が起ころ。

二月一二日から3月4日まで『歌よみに与ふる書』を発表し、短歌革新運動を開始する。

三月。腰部の手術。五月。「俳人蕪村」を連載。七月一三日、みずから墓誌銘をつくる。七月、人力車で都内めぐり。

一八九九 明治三二

一月。『俳諧大要』三〇〇〇部がほととぎす発行所から出版される。

三月一四日、根岸短歌会を始める。
九月、人力車で近郊をめぐる。

一九〇〇 明治三三

一二月に病室南の障子戸をガラス戸に変えたことで、病床から外が見えるようになり、病室に日が入るようになったと非常によろこぶ。

一月二日、伊藤左千夫が入門する。

一月一〇日、ホトトギス誌に随筆『犬』を書く。写生文を提唱する。

一月、高浜虚子と散文研究会「山会」をおこす。

三月、長塚節が入門する。

四月二九日、人力車に乗って伊藤左千夫宅を訪問。

八月一三日、二八年以来の大量咯血。

八月二六日、漱石が英国留学の挨拶に寺田寅彦とともに訪れる。

一九〇一 明治三四

一月一六日『墨汁一滴』を「日本」に連載開始。その中で漱石の俳句を高く評価する。

二月二八日 伊藤左千夫らのもてなしで、初めて会席料理を食する

八月二六日 俳談会を子規庵で開催、出席者二十名

九月二日から非公開の日記『病臥漫録』を書き始めるが一〇月二九日
でいったんどだえる。

一〇月 中江兆民の『二年有半』を批判する 三五

一〇月一三日、苦痛のあまり自殺を考える。

一月六日、ロンドンの漱石に「生キテイルノガ苦シイ」と言い送る
ロンドンにいる漱石に手紙を書く。

二月十一日 子規庵で義太夫会を催す

一九〇二 明治三五

一月一九日、症状が悪化し、麻痺剤を連日服用。

三月一〇日、『病臥漫録』を再開する。

四月五日 『春夏秋冬』夏の部刊

五月五日から新聞「日本」に『病床六尺』を連載開始。

六月二七日 写生画をはじめめる

六月二八日 『果物帖』を描く

九月三日で『病臥漫録』を止める。虚子に口述筆記させた

九月八日 足の甲に水腫ができる

九月一〇日 最後の蕪村句集輪講会を開く

九月十四日両足が水ぶくれし、ほとんど動けなくなる。

九月一七日で『病床六尺』百二十七を掲載、この日で途絶える。

九月十八日 絶筆糸瓜三句を記す（午前十一時頃）

午後昏睡

九月一九日永眠。午前一時頃

九月二一日 葬儀、田端大龍寺に埋葬される。会葬者一五〇余名

野球殿堂入り

二〇〇二平成一四 野球の殿堂入りをす

⑦ 「石井露月と子規」

湯本温泉の偶然

子規が湯本温泉に泊まった八月十六日、同じ宿に石井露月も泊まっていた。

子規がやつと温泉宿に着いたが、宿は普請途中でもあり一階も二階も客で一杯でことわられた。それでも頼み込み台所の片隅に畳を二枚敷いて寝床とさせてもらって一夜を過ごした。この時、二階の一室には石井露月が母親と共に湯治中で宿泊していた。もちろん二人には全く面識はない。この二人が後に出会って露月が子規の弟子となる。ここでは顔

を合わせることなくすれ違っている。

石井露月（一八七三明治六年～一九二八昭和三年）

秋田県旧戸米川村（雄和町）出身。正岡子規門下で高浜虚子や河東碧梧桐らと並んで名を馳せた俳人。明治二十六年文学を志して上京したが、浅草三筋町で薬局生となりのち医師試験に合格。文学修行のため坪内逍遙を尋ねたが断られる。失意の時、友人の計らいで「小日本」の主幹だった正岡子規に師事する。小説だけでなく、本格的に俳句を学ぶ。子規は露月に特に好意を寄せてかわいがった。子規の指導で頭角を現した露月だったが病弱のため帰郷、足繁く上京して子規の指導を受けた。子規は新聞「日本」に載せた「俳句評論」で『碧、虚の外にありて、昨年の俳壇に異彩を放ちたる者を露月とす』と推奨した。俳句の力量では虚子・碧梧桐に次ぐ。

石井露月年譜（明治二五～明治三五のみ記載）

一八九二 明治二五 「夜叉丸」「心中論」を執筆（二十歳）

一八九三 明治二六 八月、母と共に湯本温泉に湯治（十六日の夜も宿泊、部屋は二階）

（二十一歳）十月、文学で身を立てようと上京

一八六四 明治二七 作品を持って坪内逍遙の門をたたくも断られ、失意（二十二歳）

（二十三歳）四月十二日、藤野古白の紹介で初めて正岡子規をたずねる。高浜虚子とも出会う。

子規の斡旋で「小日本」社に入社

七月十五日、子規の命により「小日本」にリ廃刊の辞リ執筆

八月、脚気療養のため房州千倉温泉（二十二日間）、ここで「海楼つれづれ」を執筆

九月、子規から旅費を借りて一時帰郷する

十二月、脚気にて帰郷、医者を志す。子規に文筆活動続行を強く勧められる。帰郷する露月を送った子規の句

今百里 さらに夏山 何百里 子規

一八九五 明治二八 九月一四日、医師試験のため東京へ出発、一六日到着。

（二四歳）九月一六日、子規宅で句会、参加者、露月、子規、虚子、碧梧桐、

鳴雪、墨水、牛伴、其村、瓦全

九月二六日、子規宅で句会、参加者、露月、子規、肋骨、碧梧桐、

鳴雪、虚子、鵑外、天外、秋竹、飄亭、破笠

十月二六日、目黒不動境内の茶店にて露月を送る句会、

参加者、露月、子規、虚子、碧梧桐、墨水、肋骨、把栗、

愚哉、蒼苔、繞石

二月二一日、子規、新聞「日本」で「露月は奇才なり」と評す

八月七日、子規宅にて運座、参加、露月、子規、墨水、葵山、漱石、

虚子、紅緑、瀾水、

一二月三日、根岸会、参加者、露月、子規、愚哉、春風庵、四方太、

繞石、碧梧桐、杜秋、把栗、鷺峰、虚子

一二月二四日、第一回蕪村忌、この日根岸会員二十名記念写真撮影

子規、露月、紅緑、愚哉、右衛門、東洋、春風庵、碧玲瓏、

四方太、墨水、繞石、森々、胡堂、牛伴、碧梧桐、木岡、

鳴雪、虚子、秋竹、李坪（二十名）

雑誌「ほととぎす」の俳句選者となる

一月十五日、第一回蕪村句集論講（子規、虚子、碧梧桐）

二月 五日、第二回蕪村句集論講（子規、露月、鳴雪、四方太）

三月 五日、第三回蕪村句集論講（碧梧桐、露月、秋竹、虚子、子規）

六月二四日、脚気療養のため一時帰郷

一八九八 明治三一（二六歳）

一八九九 明治三三 三月二日、根岸例会
(二七歳) 三月二五日、虚子宅例会

四月一〇日、京都への旅出発、虚子新橋駅まで見送る
五月 六日、子規の紹介で京都の中川四朗を訪ねる
十月 五日、京都より帰京
六日、根岸会

二二日、虚子宅で闇汁会、ホトトギス一周年
二三日、子規、露月送別のため柚味噌會開催
十二月二四日、蕪村忌未曾有の盛会、参会者四六人

一九〇〇 明治三三 三月一〇日、子規賛助の下に「俳星」を能代より創刊(五工と共同)
(二八歳) 九月二〇日、子規、「仰臥漫録」に露月のことを記載

「俳星ヲ見ル、露月ノ日記アリソノ近伏ヲ知ルニ足ル
我日記モ露月ニ見セタシ・・・」

一九〇一 明治三四 一月一六日、子規、「墨汁一滴」を新聞「日本」に載せ始める
(二九歳) 二月一日、子規庵で義太夫催す

一九〇二 明治三五 一月 病床の子規から直筆最後の手紙、子規から露月宛の手紙は
(三〇歳) 三二通あるが、直筆最後の手紙である。一月二九日未明病床で書いたもの。病気の苦しみと露月の上京を促す内容。子規没後、露月はこれを書斎の壁に掛け、自己の怠惰の戒めとした。

三月一六日、子規から手紙、(代筆)

九月一九日、子規逝く、午前一時、露月は上京しなかった。

一月九日、「吾家の子規居士」を書き「俳星」第三卷第八号に掲載

以下 略

⑧ 「小杉天外と子規」

明治二十七年子規は東京根岸に移り、故郷松山から母と妹を呼び寄せ、子規庵を病室兼書斎と句会歌会の場として、俳句や短歌の革新に邁進しました。子規庵には文学を志す人たちが連日集まり議論を戦わしていた。そのメンバーの中には六郷出身の小杉天外の名前も見える。石井露月の日記に記されている。後藤宙外の名は見つけられなかった。

松山で発行されていた「ほととぎす」という俳誌を高浜虚子は明治三十一年にこれを引き継いで東京に移し、子規の協力を得て「ホトトギス」の第二卷・第一号より編輯発行した。俳句だけでなく、和歌、散文などを加えて俳句文芸誌として再出発している。夏目漱石や伊藤左千夫らが小説を発表したのはこの雑誌である。

一九〇八年(明治四一年)に伊藤左千夫を中心に短歌誌『阿羅々木』が創刊された。翌年『アララギ』と改題され、正岡子規門下の歌人らが集まりである根岸短歌会の機関誌となった。根岸短歌会は明治三十二年(一八九九年)三月十四日に子規庵で開かれた歌会を源流とし、同郷の後輩である高浜虚子や河東碧梧桐らにより結成され、伊藤左千夫や長塚節らも参加した。これらの参加者は、根岸派とも呼ばれた

子規没後も、子規庵には母と妹が住み、句会、歌会の世話をつづけていたが老朽化と大正十二年の関東大震災の影響により、昭和元年に解体、旧材による重修工事を行なった。近代俳句、近代短歌、近代小説の多くの作家が子規庵から巣立った。

⑨ 「正岡子規の最後」

明治三五年(一九〇二)九月十八日、画板に紙を貼ったもの持ってこさせ子規は

「糸瓜咲て痰のつまりし仏かな」

「痰一寸糸瓜の水も間に合はず」

「をととひのへちまの水も取らざりき」

と三句を書いた。これが十八日の午前のことである。午後、昏睡状態が続いた。その夜、母八重と妹律、一人残っていた高浜虚子も、誰も気づかぬうちに、子規は息を引き取っていた。あまりに蚊帳の中の静かなのを怪しんで名前を呼んだときには手が冷え切っていた。時に九月十九日午前一時、高浜虚子が急を知らせるために外に出たら、十七夜の月が明るく照っていた。」(柴田宵曲の「評伝 正岡子規」による)

「子規逝くや 十七日の 月明に」虚子

子規の遺骸は二十日、滝野川村大龍寺に葬られ、会葬者は百五十名余りでした。戒名は「子規居士」である。子規の命日を「へちま忌」と呼ぶ。

子規が、六郷を通り、黒森山を越えた「はて知らずの記」の最後に詠んだ俳句をもう一度記しておく。

「秋風や 旅の浮き世の はて知らず」

完

資料作成 岩屋朝徳